

ペリーとアヘンの授業(前篇)

2015/4

1 ペリーが来た時、日本はどう考えたか



みなさんは、ペリーを知っていますか。
たぶん知っている人が、たくさんいるでしょうね。
アメリカ人のペリーは、江戸時代の終わりのころに、日本と貿易をしようとやって来ました。

さて、もう一つ。みなさんは、この時の幕府の役人たちが、ペリーの要求に、右往左往していたという話を聞いたことがありますか。
その話を聞いてどう思いましたか。

ペリーにおどされて開国する幕府を「みっともない」「いさぎよくすぐに開国すればよかった」そう思ったことはありませんか。「ぐずぐずとためらう幕府は考えが古かった。だからこそ、幕府は明治維新で滅びたのだ」そう思っていないでしょうか。

今日は、そう考えている皆さんの方が、まちがっていたことを知ってほしい、そういう授業です。

まず、幕府に貿易を求めたのは、アメリカのペリーだけではありませんでした。
年表を見てみましょう。一番多いのは、イギリスで5回、次にロシアで4回、他にもアメリカが3回、フランスも来ています。



他にも、資料によれば、日本に来航したり目撃された外国船は20年間に70隻近くにのぼっています。

これに対して幕府は、外国船を追い払い、上陸した場合はその外国人をつかまえるか、殺してもよいという異国船打ち払い令を出します。

年	国
1792年	ロシア
1796	イギリス
1804	ロシア
1808	イギリス
1811	ロシア
1816	イギリス
1817	イギリス
1837	アメリカ
1844	フランス
1845	イギリス
1849	アメリカ
1853	ロシア
1853	アメリカ
	ペリー

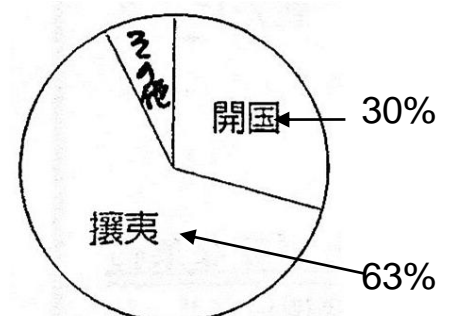
この幕府の強い態度を打ち破ったのは、ペリーでした。
最初に貿易を求め、半年後にもう一度その答えを聞きに日本にやってきたのですが、その当時の人々は、ペリーの要求に、どう答えたらいいと考えていたでしょう。

いろいろな意見が出て、混乱したのは、幕府だけではありません。

実は、幕府は、ペリーの国書を全国に公開し、大名はもちろん、下級武士にも、そして一般の人々にも意見を求めました。

各藩・各大名はどんな意見が多かったか、グラフを見てみましょう。

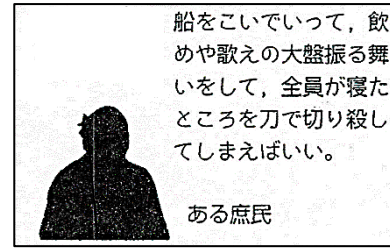
54藩が意見を述べていますが、そのうち



開国派は、16藩、攘夷派が34藩です。
圧倒的に、攘夷派が多くて、外国は攻撃し追い払うべきだと、考えられていたことがわかります。

大名だけではありません。一般庶民の意見では、異国船打ち払い令にしたがって、次のような意見もありました。

作戦として、一生懸命考えたことがわかりますね。



次に、なぜ、日本の多くの人々が、当時、開国に反対だったか、その理由を、次の中から選んで、考えてみましょう。

なぜ開国に、多くの人々が反対したのでしょうか。

A:江戸時代、260年間、鎖国の政策を取り続けてきたから。

B:外国を怖れていたから

C:日本の文化が遅れていたから

さて、ほんとうはどうだったのでしょうか。

この答えを知る前に、もう一つ、知っておくとおもしろいことがあります。

教科書にも出てくる幕末の活躍する武士たち、政治を担う人々は、ペリーが来た時、何歳くらいだったのでしょうか。

たとえば、ペリーが来た時の次の人物の年齢を当ててみましょう。

- ① 坂本竜馬 ()歳 ② 西郷隆盛 ()歳 ③ 勝海舟 ()歳
④ 伊藤博文 ()歳 ⑤ 明治天皇 ()歳

さて、いったい、この時、彼らは何歳だったでしょう。

また、ペリーの黒船を見ている人物は、この中の何人でしょう。

答えは、次の表のとおりです。

ペリーが来た時、幕府の役人の勝海舟ですら 30 歳です。他の武士たちは、もっと若く、その多くが血気盛んな若者(今でいえば高校生くらい)ですから、外国船を攻撃することしか考えていませんでした。

たとえば坂本竜馬も「ペリーが攻撃をしてきたら、いつでも外国人の首をとり、殺す覚悟がある」という趣旨の手紙を書いています。

その後も、イギリス人を殺傷した薩摩藩の生麦事件や、外国船を長州藩が下関で攻撃した事件だけではなく、伊藤博文らも 20 歳前にイギリス大使館を放火して焼き討ち事件を起こしたり、外国人側についたと考えた学者を襲撃して殺害したり、過激な行動をしています。(放火殺人です。右はその頃の伊藤博文)

一方、幕府は、ペリーが来る前に、日本に接近した船に対して、水と食料の補給を認めるまでは、軟化していました。

人物	ペリーの時の年齢
将軍慶喜	16歳
勝海舟	30歳
西郷隆盛	26
坂本竜馬	18
伊藤博文	12
明治天皇	2歳



では、日本人の多くが、なぜ、開国などもってのほか、外国人は攻撃して追い出すべきだ…と考えていたのでしょうか。

先に考えたクイズの答えは、**B:外国を怖れていたから**・・・でした。

「日本人は、考え方が遅れていた。だから、貿易をしたがらなかった。貿易をしたがらないのは、遅れた考え方だ」これは、実は、19 世紀には、大まちがいだったのです。

日本人も当時の世界の情勢を知っていた、特に幕府は最新の情報を知っていたからこそ、貿易をしたがらなかったのです。

その情報は、長崎の出島から報告されていました。

一つは、アヘン戦争、もう一つはインドの植民地化です。

2 アヘン・麻薬のほんとうの姿とは？

アヘン戦争の情報は、中国からやってきました。

アヘン戦争の真実を、もっとよく知るために、まず、最初に、アヘンの怖ろしさを知ることから、始めましょう。

アヘンの種を知っていますか。



先生が配ったアヘンの種、これは、本物では、もちろんありません。



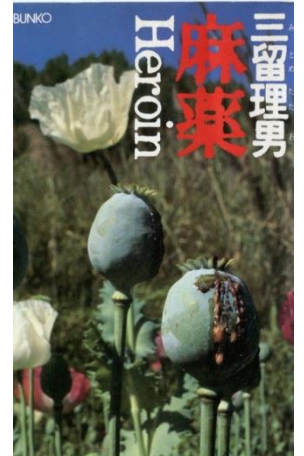
アヘンはケシと同じ種類の花から取れますが、ケシの実にはポピーシードと言って食用になっています。

みなさんも食べたことがあるはずです。あんパンの上についている、あるいは丸いフランスパンの上についている白い小さな粒です。これは、もう、火を通してあるので、地面に蒔いても芽は出ません。それに、種には、麻薬の何の成分も含まれていません。

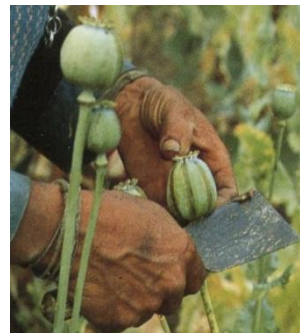
麻薬の成分が含まれているのは、もっと違う部分なのです。

アヘンはどうやって作られるのか。

三留理男著『麻薬』を参考にして、麻薬栽培のようすと、その恐ろしさをたどってみましょう。(この本は約30年ほど前に、まだケシ栽培がおこなわれていた東南アジアを取材した本です。)



①アヘンは、ケシの花が咲いたあとの実からとります。



②しかし、種を取るわけではありません。

果実にナイフでいくつものすじをつけておきます。



③すると、しばらくしてこの傷から汁が出てきます。

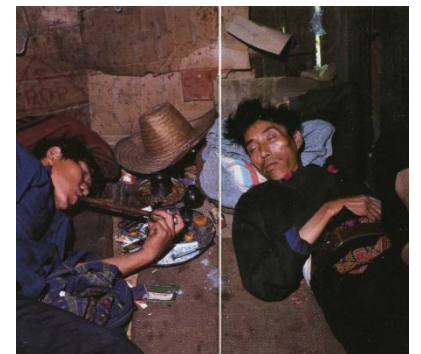


④この液を集めて精製します。

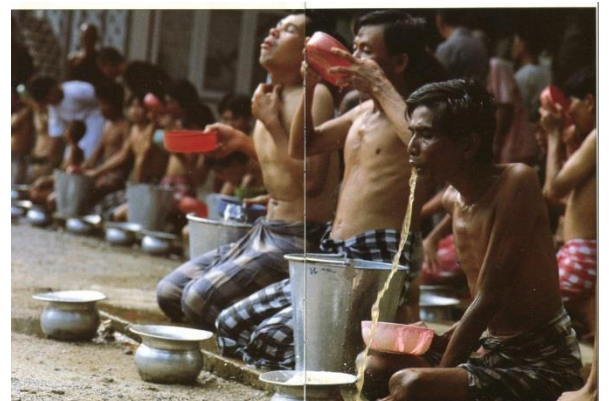
科学的に精製するとヘロインができるのです。

⑤当時の山岳民族の人々は、貧しい中、アヘンを栽培し販売して生活していました。

貧しさのあまり、かぜの時などの薬としても使い、中毒者がたくさんいました。



⑥この地域では、漢方薬のような煎じた薬を、飲んで吐き、飲んで吐きという動作を一週間ほど繰り返してようやく中毒から抜け出られる…という治療を行う寺院がありました。



今は、この地域では、アヘンは作られていません。

次に、麻薬の怖ろしさを描いたこの本の文章を読んでみましょう。

麻薬って何だろう。

まずケシから取れるアヘン系麻薬から見よう。その代表的なものは、モルヒネとヘロインである。

モルヒネは一八〇五年、ドイツの薬師セルチュルネルがアヘンから取り出したアルカロイドで、ギリシャ神話の眠りの神モルフェウスからその名がつけられたことは有名だ。モルヒネは現在でも外科手術の際の基礎手術で使われるから、知っている人も多いと思うが、鎮痛効果は絶大だ。

たとえば、わずか十ミリグラムの注射によって、ほとんどの痛みは消失する。しかも注射しからの効果も早く、静脈内注射の場合には、注射後、わずか二〜三分で鎮痛作用があらわれ、まさに劇的である。

そして、鎮静作用とともに陶酔を生じるため、いわゆる薬物依存になりやすいのだ。たとえば、あなたがモルヒネを射ったとしよう。注射すると、数分後に気分がよくなり、身体全体がだるくなる。さらに、精神的な苦痛もとり払われ、ストレスがなくなる。いわゆる自己陶酔の世界に入ってしまうのだ。

この陶酔の正体は現代医学をもってしても、いまだ解明されていない。ではもっと大量に注射した場合はどうなるだろうか。三十ミリグラムだと、深い睡眠に陥る。六十ミリグラムで昏睡状態だ。呼吸は弱くなり、顔は紫色に変色する。

しかし、これを連用すると必ずといっていいほど精神的依存が生じる。つまり中毒になるのだ。そして、薬が切れると、強い禁断症状が生じ、次第にあなたはモルヒネの量を増やすようになり、身体は痩せて、顔面蒼白の麻薬患者になることはまちがいない。

では、ヘロインを射つとどうなるか。

注射器の針が血管にヘロインを流し込んで数秒、あつという間に耽美な世界に入るといって、すべてのことに恐怖感がなくなり、不安が解消される。全身が軽くなり、深い陶酔状態に陥る。しかし、これをいったん味わってしまうと、少々の意志ではもう戻れなくなってしまう危険な代物だ。

「一回だけやってみよう」との好奇心ではじめたものの、「もうやめよう、もうやめよう」と思っているうちに卑屈な常用者と化し、日々ヘロインを求めただけの男女に変貌していく例は枚挙にいとまがない。

最初はふつうの注射のように腕に射つが、次第に針が受けつけなくなると、血管にそって

次々と腿、首すじ、足先と射つ場所を変えていく。西ドイツでは、全身ミミズ腫れになって射つ所がなくなった中毒患者が、舌に射ち、ショック死した例さえある。

ヘロインがさらに危険なのは、次第に量が増えることである。はじめて射つた時の快感を得ようとすると、同一の量では足らず、むしろ逆に、気持ちがいらいらし、非常に凶暴な感じになりやすいのだ。したがって、射つたびに量は増大していくわけだ。

そして、さらに悪いのは薬が切れた時である。「自律神経嵐」と呼ばれる恐ろしい禁断症状が待ちうけている。

なんともいえない疲労感からはじまって、アクビ、クシャミが連続し、ヨダレや鼻水、それに続いて全身のけいれんが起こる。この段階で気がつき、耐えきれれば五日目にはなんとか回復しはじめるという。

ところがこれには相当の意志がいる。なぜなら、ヘロインさえ射れば、その不快感がすぐに消え失せるからである。そして再びヘロイン中毒、それも第二段階へと入っていくのだ。

第二段階の禁断症状はもっと恐ろしい。

身体の中の筋肉に激痛が走り、悪寒がまるで身の毛もよだつように襲い続け、下痢の連続。その苦しみのために失神してしまう人さえいる。これを逃れるには、ヘロインを射つしかない。また多量のヘロインを追い求める。禁断の恐ろしさから逃れるために、自分の社会的生命を自ら捨て、ヘロインに依存する。肉体はまさにボロボロのようになっていくのだ。

さらに進むともう末期的である。失神、筋肉の異常な痛み、全身のけいれん。これが繰り返し襲ってくる。人は完全に錯乱状態に陥る。自分の指にかみつき、食いちぎる。壁に身体を骨が砕けるまでぶつける。延髄にまでマヒが起こり、窒息、そして死に至る。

そうした禁断症状から逃れたい一心で、ヘロイン中毒者はヘロインを手に入れるためだつたら何でもする。そして善悪の判断がつかなくなり、廃人となっていくのだ。



アヘンの怖ろしさにふるえる思いがしますね。

この文章を読んだ今までの中学生たちは、「絶対アヘン・麻薬はやらない」と言っていました。
(社会科版・薬物乱用防止教室終わり)

こんなおそろしい名前がついた戦争は、なぜ起きたのでしょうか。

3 アヘン戦争の原因は何でしょう。

さて、歴史に戻りましょう。

アヘン戦争は、中国とイギリスが戦った戦争です。

問題は、アヘンの貿易でした。

イギリスは、大量にインドで作らせたアヘンを中国にどんどん売り込んでいました。

右にその図があります。

人間の頭ほどの大きさの玉が、すべてアヘンです。これが、中国に売り込まれるのですから、中国は、たまったものではありません。

その上、一度麻薬漬けになったら、止められないのが中毒ですから、アヘンの消費量は、減ることはなく、増え続けるばかりです。

中国の人々は、麻薬漬けになる人々が増え、イギリスは、そうなればなるほど、大もうけしていたのが当時の現実でした。

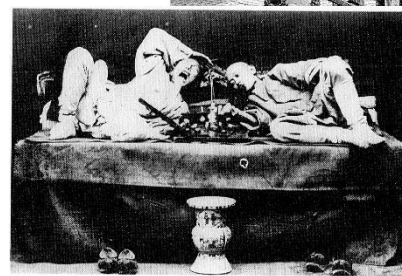
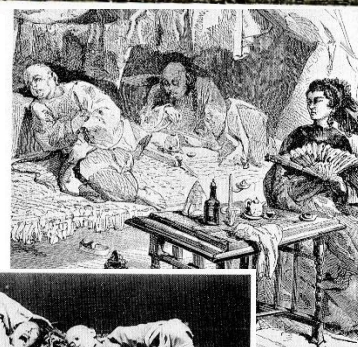
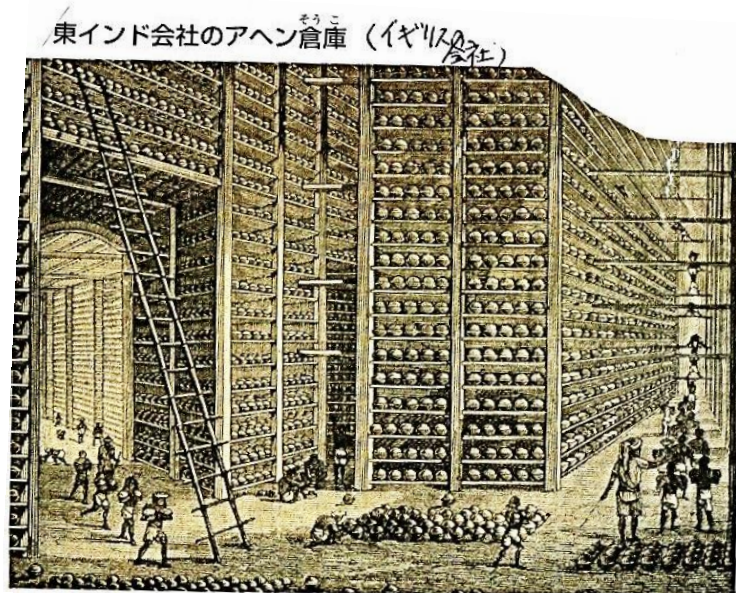
アヘンづけになっていく中国には、勇敢な大臣“林則徐”という人物がいました。

この人が、イギリス国王に抗議した文章があります。

このように抗議しても、結果は変わりませんでした。林則徐大臣は次に、実際の行動に出ます。

密輸業者から取り上げた大量のアヘンに火をつけ、燃やしてしまったのです。

イギリスは、これを認めず、アヘンの密輸をやめないために、戦争となりました。これがアヘン戦争の始まったきっかけです。



リンチーロー
林則徐のイギリス国王への手紙

あなたの国は、わが国の商品
を買い、自分で使うだけでなく、
他の国へ売って3倍も利益をおさ
めている。この上、人を害するアヘンを売り
さばいて利益をむさぼる必要がどこにあるだ
ろうか。もし、他国がイギリスに来て、人々
をまどわせ、アヘンを売り吸わせたとしたら、
国王はこれをにくみ、固く禁止するにちがひ
ない。

では、アヘン戦争の結果は怎么样了のしょう。

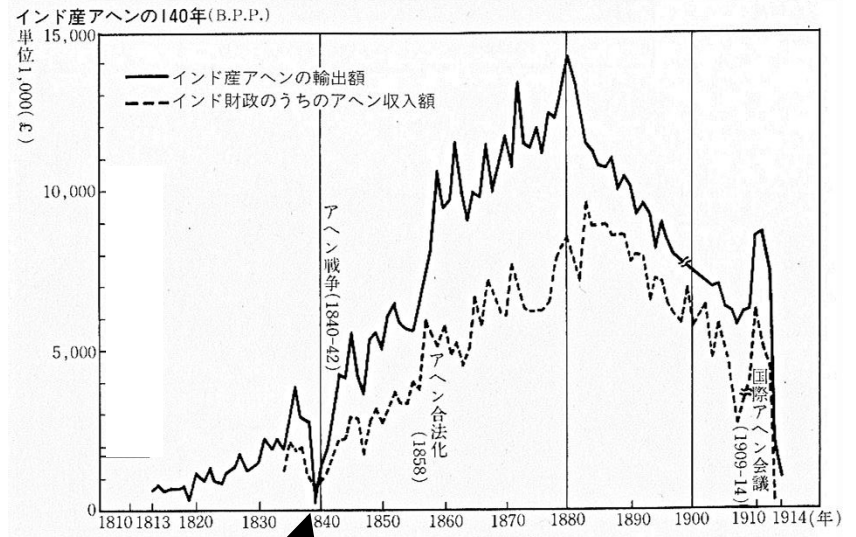
右の絵を見てください。

蒸気船と大砲を使ったイギリス海軍は、その武器を生かして、中国という巨大な帝国を、敗北させました。



右のすみの方にいるのが、そのイギリス艦隊の蒸気船です。

そして、それどころか、南京条約で、莫大な賠償金を払う約束をさせられ、香港も奪われます。そして、次のグラフを見てください。



林則徐がアヘンを処分した時に0に近い量まで減っているにもかかわらず、アヘン戦争後に、インド産アヘンはほとんど中国に持ち込まれ、その量は戦争以前よりも10倍以上にもなる量でした。

打ちのめされた中国では、このあと人々の反乱も起きていきます。

こうしたアヘン戦争の一部始終を多くの日本人が知っていたのです。

公式記録として、出島から、中国・オランダ風説書で報告されるだけでなく、さまざまな伝聞の形で、日本にも、その経過が伝わっていました。

この事実を知った当時の日本人が、ヨーロッパ・アメリカ諸外国と、そう簡単に仲良く貿易はできないだろうと、考えたことは、想像できます。あるいは、「中国のようにアヘンづけにされるかもしれない」という警戒心や危機感を持ったことも、よくわかります。

ペリーが来て、貿易を求めた時に、多くの日本人が攻撃して追い払え、と考えたことも、だからこそ当然でした。

